

【高等学校の部】優秀賞

私にとってのふるさと

日本文理大学附属高等学校 3年

ながはま よしと
長濱 喜翔

私が「ふるさと」である大分県佐伯市の町に移り住んだのは、小学5年生の春だった。生まれ育ったのは愛知県。大勢の人で賑わい交通網が発達し、店があちこちに立ち並び、どこへ行くにも不便を感じない都会の生活に慣れていた当時の私にとって、佐伯への引っ越しは大きな環境の変化であり、なおかつ当時10歳の私は、戸惑いを隠せなかった。

引っ越しして来たばかりの頃、最も私の印象に残ったのは、目の前に広がる自然豊かな環境である。周囲は山に囲まれ、近くには大きな川が流れ、港に行くと新鮮な魚が常に並べられている。高層ビルが建ち並び、四六時中人で溢れ返る都会の街とは対照的に、夜になると静まり返る。そんな大分の生活環境をはじめは気持ちが良いと感じていたものの、心のどこかで「不便さ」を感じていた。しかし、日々を重ねるうちに私の感じ方は少しづつ変化していった。佐伯で暮らす人々は、引っ越しして来たばかりで右も左も分からぬ私たち家族に対して、親切に温かく接してくれた。野菜や、お菓子をおそらく分けてくれる近所の方、初対面でも気さくに話しかけて仲良くしてくれる同級生。そうした毎日の中で私は「この町には、人と人との距離を縮める温かさがある」と感じるようになった。都市に住む人々にはどこか何かに追われているような雰囲気を感じることがあり、毎日に精一杯で常に苦しそうで挨拶もなくすれ違うことが当たり前だったが、佐伯では誰もが隣の人のことを気に掛け、支えながら生活している。それは決して物質的ではない。人の心の豊かさに満ちた心地良い環境であった。また、佐伯での暮らしを通じて私は「自然と共に生きていく」ということを直接肌で感じるようになった。番匠川のせせらぎ、城山の頂上から見下ろす絶景、どこまでも続くキレイな海や、田んぼの中を飛び交うトンボ。それらは単なる風景ではなく、人々の生活を深く結びついていた。漁業や農業を通じて自然の恵みに感謝し、穏やかさがありながらも力強く暮らす人々の姿に触れることで、私は「自然との共生」の価値を実感するようになった。このようにふるさと佐伯には都会での生活では決して感じることのできない魅力が教え切れない程多くある。しかし現在、佐伯市は少子高齢化や人口減少といった課題に直面している。かつて賑わいを見せた商店街も、今ではシャッターを閉じた店が目立つようになった。だがその一方で他の地域にはない資源と可能性があることは事実である。豊かな自然、受け継がれてきた文化、そして人の温もり。これらを守り、後世へ残してつなぐこと、活かしていくことこそがふるさとの未来を切り拓く鍵だと私は考える。

将来、私は大分県に残り地域の環境保全やまちづくりに関わる仕事をしたいと考えている。再生可能エネルギーの導入や、海、山、川といった自然資源を活かした観光や教育事業を通じて持続可能な地域社会の実現に貢献したい。また、市外から勤める人々にも佐伯の魅力を発信して、「また来たい」「ここに住みたい」と思ってもらえるような仕組みづくりにも携わりたい。私は、愛知という都市と佐伯という地方、双方のことを知るからこそ、「本当の豊かさ」「ほかでは感じられない良さ」とは何かを考えることができる。都市の便利さやスピード感には確かに価値がある。そしてそれを佐伯で再現することは難しいだろう。しかし、佐伯のように自然とともに暮らし、人と人が深く関わり合う地域には、別のかたちで豊かさがある。それは、物にあふれた暮らしでは決して得られない心の充足だ。今はまだ佐伯は人の集まる町とは言えないが、佐伯の魅力を伝えることができれば再び多くの人が賑わう明るい未来がきっと訪れるだろう。